

## 社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働による人類進化理論の新開拓

### 第12回定例研究会報告

#### 1. 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です

Copyrighted materials of the authors

#### 2. 研究会基本情報

日時：2022年2月12日(土) 13:00～18:30

場所：ハイブリッド開催 (Zoom、AA研304室)

報告者：

1) 足立薫 (京都産業大学)

霊長類学におけるエスノグラフィー

2) 花村俊吉 (京都大学)

待つ・合わせる・見せる—相互行為と社会の循環、猿曳き、写真

#### 3. 内容 (要旨および質疑応答・議論)

##### 3-1) 霊長類学におけるエスノグラフィー

(足立薫)

要旨：

はじめに

社会性の起原を探求するために、霊長類学と文化・社会人類学が協働するには多くの困難が伴う。両分野の協働は、実際には人間とヒト以外の霊長類という、異種間の比較研究を行うことでもある。異種間比較の方法の一つとして、エスノグラフィーの有効性を検討した。エスノグラフィーは、多くの人文社会科学領域で有効な方法として用いられている。一方、進化生物学の一分野として展開している現在の霊長類学で、主要な方法として用いられる例は限定的である。そのような状況を踏まえ、本報告では霊長類学におけるエスノグラフィーはどのようなものであるか、またそれが社会性の起原の解明に寄与しうるかどうかを明らかにすることを試みた。

## 霊長類学の方法

霊長類学の研究方法では、研究計画を第一段階として、それに続く観察、サンプリング、分析・記述の3つの段階を区別することができる。4つの段階は、相互に関係しあっているが、分野間での協働のための方法論の比較を行うときには、その特徴を区別して扱う方がよいかもしれない。

分析・記述の段階で行われるのは、データの整理と統計処理である。Altman (1974) や Martin and Bateson (1990) のような、動物行動学の標準化された方法では、あらかじめ予測された作業仮説の検定を行う過程がこれにあたる。一方で、京都大学の霊長類学の実践の伝統においては、フィールドで得た「イメージ」から帰納的に仮説を作り、イメージを解釈して他者に伝えることが、分析・記述の重要な要素であるとされる。イメージの解釈に擬人主義的な要素が入ることは原理的に避けられないが、その点に自覚的である必要がある。無自覚、無反省な擬人主義は、進化論の誤用につながる危険性をはらんでいる (Dolhinow 2002)。

観察とサンプリングの段階では、対象となる動物の行動を操作的に定義し、客観化された手法を使うことが目指される。そのような方法で収集されたデータは、第三者にも信頼に足るものとして分析段階での解釈の裏付けとなる。データは分析段階で作業仮説を検定するのに適したユニットに整理されることで、プールして比較することが可能になる。データを足し合わせることで、ある行動がもたらす構造が明らかになるが、そこでは観察が行われたときの、個々の行動の文脈が失われる。

高畑 (1989) は霊長類の行動観察で、繰り返す時間と繰り返さない時間に焦点をあて、時間軸の設定の重要性を強調した。繰り返し起こる事象は、プールされ足し上げられることでその構造を現し、共時態の観点で解釈される。一方で、繰り返さない事象とは、まれにしか起こらない事象で、プールすることができないため、歴史として通時態の観点で解釈される。

## 霊長類学におけるエスノグラフィーとは

霊長類学におけるエスノグラフィーは多岐にわたるが、今回は以下の大きく二つのものに整理して紹介した。ただし、ひとつの著作が両方の性格をもっているものも多数ある。

### 1) 霊長類学研究の実践にまつわる、人間がかかわる事象に関する考察

野生霊長類の生息地と生活圏を重複させている、ホモ・サピエンスの個体に関する、さまざまな観察事例がここに含まれる。「現地の人々」だけではなく、同僚や指導者の研究者、学界などを対象にする場合もある。エスノプライマトロジーと呼ばれる領域の多くがこの種類にあたる。科学論文の形式の記述には現れない、エピソードや回想が主で、エスノプライマトロジーはこれを論文にしてもよいという環境を整備したが、論文の「価値」は保全にかかわる提言があるかどうかにかかわらずに収斂していく傾向がある。

## 2) 霊長類を対象とした質的研究

スタンダードな動物行動研究方法にとどまらず、包括的で記述的な方法論を用いておこなわれる研究で、エピソード、アネクドットを用いた研究とも呼ばれる。観察法、データ・サンプリング法、記述法のすべての段階で、特徴的なメソッドを使うことになり、研究者間での標準化は達成されない場合が多い。社会学における質的研究メソッドのように標準化されていないことが特徴で、行動の人間への類似度が高い類人猿に用いやすいと考えられる。このタイプの霊長類研究は、とくに擬人主義と常に向かい合わなければならない。

「エスノ」という言葉が「人間の」あるいは「人間に関わる」を意味するならば、1) は人間を考察対象にし、2) は人間を対象にするかのように、人間以外を対象にする研究のタイプである。

### 霊長類学のエスノグラフィーと社会性の起原

一定期間の観察データをプールして、ひとつの構造を描くのが共時態の研究方法であり、データをプールするとき、そのデータのひとつひとつに流れる時間が捨象され、等質なものとして足し算され比較される。反対に通時態の方法論とは、文脈に依存する行動の連鎖のつながりを意識することと考えられる。通時態の観方では、まず突発的で歴史的なイベントが想定されるが、同時に日常の連続した時間の中に現れる構造化されない非構造の様態の解明も可能なのではないだろうか。伊谷の社会構造を作る行動としての第8類型の分類は、共時態であるところの構造に対して、その構造を作る/壊すという意味での通時態的行動の日常性を対比する、という意味で両者が交錯する行動類型である。

霊長類学の実践では、人間と霊長類が場を共有する。この特徴が、マルチスピーシーズ人類学との接点となる。人間と霊長類、観察者と被観察者の間に非対称な構造があり、人間が特権的な観察者の立場におかれていることを意識して、両者の共存そのものに注目するならば、記述する人間に再帰的に注目することが重要だろう。同時に、霊長類の研究は究極的には人の理解を求めているので、霊長類の行動の中に人間を読み込む。これは単純な擬人主義にとどまらず、人間社会のモデルを霊長類に探す場合にも同様である。霊長類はつねに人間の性質の参照項として機能するし、そうすることが推奨されてきた。この点については、「進化」を科学として展開していた自然人類学・形質人類学が要請したことでもある。人間と霊長類の共存、観察の再帰性、擬人主義の自覚的利用といった要素を含んで発展してきたのがエスノプライマトロジーであるが、今のところ霊長類学の中では保全に役に立つかどうかという基準のみが重視され、霊長類学のエスノグラフィー的实践としては未整備と言わざるを得ない。

非構造の社会性に着目し、非構造の社会進化史を描くことで、人類の社会性の起原にアプローチする方法論を模索することを今後の課題としたい。単線的な適応主義的な人類進化ではなく、偶然に左右され、同時多発的に、あいまいな形で進行する適応プロセスの全体と捉えられるような進化観を想定しながら、非構造の社会性の種間比較を可能にする方法論

となるような霊長類学的エスノグラフィーを検討することが求められる。

### 質疑応答と主な議論:

#### <エスノグラフィーについて>

- 今回の発表では記述の方法として IMRAD (Introduction, Methods, Results And Discussion) 形式とエスノグラフィーのどちらに焦点を置いているのか。
  - 今回の発表では、IMRAD 形式で書くというプロセスの中に、「エスノグラフィーを書くとしたらどこを変えたらよいか」というポイントを探るため、IMRAD 形式の段階を細かく分けて紹介した。
  - 現在出版されている霊長類学のエスノグラフィーは、IMRAD 形式をとらないことが多い。
- 「エスノ (民族)」という言葉は、人間を対象としたもののような印象をうける。動物行動学的な側面からサルを逸話的に記述することはあるが、それを第3者から「エスノプライマトロジー/エスノグラフィー」と呼ばれることはあるのか。
  - サルに関する逸話的なエッセイを書いた場合は、「エスノグラフィー」と呼ばれる可能性はある。
  - 「エスノ (民族)」と「エスノグラフィー」は基本的には関係ない。
- エスノグラフィーの概念は2つある。(1) 1950年代の教科書では、「エスノグラフィー」は文化人類学の一分野であり、「グラフィー」とつくのは、「記述的である」という意味だった。(2) 1980年代以降の「エスノグラフィー」は方法を念頭においたものとなっている。文化人類学者の研究成果としての著作 ≡ 民族誌 (エスノグラフィー) という理解で矛盾しない。
- 現代のエスノグラフィーは質的調査として位置づけられており、統計解析を伴う量的調査とは対極にある。社会学においては、インタビューも質的調査に含まれる。同じ「エスノグラフィー」という言葉を用いたとしても、その意味は分野により異なる。
- 文化人類学ではエスノグラフィーを書くこととモノグラフを書くことはほぼ同義である。モノグラフは「1冊の本を書く」という意味である。
  - 辞書によると、モノグラフは1本の論文でもよいとのことになっている。この場合の「モノ」は1つのテーマという意味だろう。
- 動物のエスノグラフィーシリーズ:新・動物記(黒田末壽・西江仁徳編,刊行中)の編集者として、執筆者になにをお願いしているのか。
  - 新・動物記の執筆者には「現場で自分はなにをやってきたのか」、研究者自身のことを書いてほしいとお願いしている。足立さんの発表ではエスノグラフィーの事例として、新・動物記を挙げていたが、本書の内容は「エスノプライマトロジー」側に含まれ

るかもしれない。

→ 科学論文を書くことは、きれいな切り身をつくる作業に似ているが、この新・動物記ではもともとの獲物を書いてほしいと考えている。

### <作家性について>

- 方法論が整備されてきたのは、天才か凡庸かにかかわらず、誰が行っても同じ論文が書けるようにするためである。その対極はなにかというと、作家性のようなものなのかもしれない。
  - 「学生をフィールドにほうりこんだら、なにかいいものを持って帰ってくるだろう」という京都大学式の指導方針（伊谷純一郎流）は、その人の個性を大事にしているように感じる。また、「とりあえずフィールドにでかけ、そこで何らかのイメージをえる」というのは作家性につながるのではないか。
  - 「とりあえずフィールドに出かけ、イメージを持ち帰る」という言葉に作家性は求められていないのではないか。観察者がなにかを上手にみいだすというのではなく、「対象をして語らしめる」ということをこの方法論では目指していたはずである。
- 作家性は極小にするべきであるというのが、科学論文である。極小にするだけで、ゼロにはできない。極小にするさまざまな仕掛けがある。仕掛けをかけたことにより、極小にするべき作家性がかえって際立つという、そういうおもしろさがあるのではないか。
- 例えば、科学論文で作家性の部分が際立つ事例はあるか。
  - ドウ・ヴァール (Frans de Waal) の”Reconciliation”の話はそれにあたるのではないか。サポルスキー (Robert M. Sapolsky) やフエンテス (Agustin Fuentes) の論文もそれに近いのでは。
- 作家性を個性と言い換えてもよいのではないか。その調査法を誰が行っても良いということは、それぞれの個性が入りこんでもよいという程度で作家性を考えれば、それが入るのは原理的に避けられないのではないか。

### <as if 型のメタファーについて>

- Dolhinow (2002) の「as if 型のメタファーは避けるべき」という指摘はその通りだと思う。単なる as if を避ける上で、量的なデータは必要である。ただし、ドウ・ヴァールの”Reconciliation”の検証は as if 型のメタファーではなく、「本当にサルは和解する」ということを私たちに納得させようとしていた。
  - Dolhinow (2002) の論考では、「無自覚で反省的でない」のはよくないが、自覚的で反省的であれば目指すべきであるとも読める。
- 「対象をして語らしめる」ということを追求した場合、「ヒトを見るようにサルをみましよう」・・はい、終わりという話になり、起原や進化の話がでてこなくなる。本科研プロジ

エクトの霊長類学者側は、生物進化論としての進化を扱い、人類学者に語りかける必要があるのではないか。

### <進化について>

- 発表者は、進化を歴史として捉えているように感じた。進化に歴史的な側面はあるが、社会学から動物行動学にいたる分野では進化はプロセス(自然淘汰)として扱われているのではないか。生物学の分野では、適応主義パラダイムが受け入れられており、歴史主義は敗北している。
  - この研究会は「社会性の起原」も扱う。起原はプロセスではないのではないか。
- 社会に共時態/通時態という視点を持ちこんだ場合、共時態は「構造」にあたり、通時態は「非構造」にあたる。一般的に、生物学的に社会を扱う場合は「構造」の方を扱う。進化の話も共時態と通時態にわけて考え、進化を共時態として考えていくと構造が変化することが進化となる。一方で、通時態は歴史となる。歴史(通時態/非構造)を科学的に考えることはできるのか。
  - 時間スケールを広げた場合、通時態も共時態となる。共時態か通時態かは、スケールの取り方で異なる可能性がある。歴史だけでなく、ツールとしてプロセスも併せて扱っていききたい。
- 1つ1つの現象は、なにか本質から生み出されたサンプルである。共時態というものを「構造」と捉えると、この考えにぴたりと合うように思う。繰り返しおこり、足し算ができるということは、1つ1つの行動は、構造から生み出されているということである。つまり、個別の観察対象が行動しているのではなく、構造が行動を生んでいるというのが共時態としての捉え方である。個別の観察対象である存在は、必ずしも「内面をもつ存在」といわなくてもよい。構造が現実社会に具現化されたものではなく、そこに固有の存在としてある行動を生み出すものとして、考えられるのではないか。構造と個体がそれぞれに交差するところがおもしろい部分ではないだろうか。
- 非構造の種間比較を考えているとのことだったが、種間の歴史を比較するというようにどのような意味があるのか。
  - 非構造は比較やプールができないものだが、そこで生じている出来事は適応で考えていきたい。たしかに、大きな話で適応を扱っても意味はない。1つ1つの場面で適応を科学的に考えた場合、「生存することはたまたま」という結論になると思うが、適応的なプロセスが評価できるとするなら、そこは厳密に適応というプロセスで考えていけばよいのではないかと考えている。
  - パターン(アルゴリズム)になにを取り入れるのかはバラバラだとしても、とりいれるもの自体はプロセスとしての適応でないといけないのではないか。

### 3-2) 待つ・合わせる・見せる—相互行為と社会の循環、猿曳き、写真

(花村俊吉)

#### 要旨:

#### 1. 「社会性の進化」と「人類学と霊長類学の共同」

本発表の目的のひとつは、本研究会のとくに「定例研究会」のテーマである「社会性」およびその「進化」に対して、私のこれまでの研究（第2節）や現在計画中の研究（第3節）からどのようなアプローチが可能であるかを探ることであった。もうひとつの目的は、本研究会の大きな特徴である「人類学と霊長類学の協働」を進めるにあたって、主として「方法論研究会」や「若者研究会」で議論になってきた以下の課題に対する「写真」のもつ可能性を探ることであった（第4節）。その課題とは、サル屋（ヒト以外の霊長類〔以下、霊長類〕を対象とする研究者）による霊長類の観察場面や行動記述をヒト屋（ヒトを対象とする研究者）にいかにかつ伝えるのか（逆もまた然り）、さらにはサル屋とヒト屋が行動を記述する際に分野を超えて分析の枠組みとして共有できるような行動類型はありうるのか、というものである。

トピックが3つあり、またいずれも考えが練られておらずまとまりのない発表になったが、いずれのトピックにおいても、「待つ・合わせる・見せる」とまとめうるふるまいが（少なくともその構想段階では）言わば通奏低音のように繰り返し登場してきたため、これを発表タイトルに掲げた次第である。なお、この報告では、便宜上、発表時とは一部順番を入れ変えたほか、発表時および発表後に slack 上でいただいたコメントを踏まえて内容を更新した部分や、この機会を活かして発表時にはまったく言語化できていなかった内容を改めて書き出した部分があることをお断りしておく。この場を借りて、コメントをくださった皆さまへの感謝を記しておきたい。この報告を通じて発表内容を再考するにあたり、とくに次節で本研究会のテーマに対する私の悩みが少しは整理できたと感じているが、まだその経緯を振り返ったに過ぎず、引き続きコメントを頂戴しつつ、そもそもの問題設定やそのための方法論から再考していきたい。

#### 2. 「相互行為と社会の循環」のあり方の「進化」を考えることは可能か？

##### 2-1. 「社会性」と「進化」をめぐって

本研究会における「社会性 (sociality)」は、私も途中から参加しているこの研究会の前身である AA 研共同利用・共同研究課題『人類社会の進化史的基盤 (1) ~ (5)』において、「他者とともに生きる術」とほぼ同義であり、「同所的に他者とともに生きていくための社会的能力」と定義されている（河合 2016, pp. 2-3）。本研究会では、このような意味での「社会性」にアプローチする多様な方法論が紹介されてきたが、私自身の関心に沿って大きく分けると、とくに「進化」との繋がりをめぐって、理論的には互いに排他的ではないはずだが共約することの難しい以下の2つの方法論があるように思える。自然選択がはたらく表現型になりうる個体の行動や認知の傾向として社会性を捉える

方法論と、当該社会を構成する複数の個体のあいだで繰り返される相互行為のやり方として社会性を捉える方法論である。

前者の方法論は、たとえば、霊長類は血縁選択を通じて非血縁個体より血縁個体に対して利他的にふるまう、食物の分布様式と捕食圧の兼ね合いで単独生活を送ったり集団生活を送ったりすると考える、行動生態学や社会生態学に代表される適応主義的アプローチのことであり、そこではこうした行動傾向（社会性）が自然選択を通じて「進化」してきたものであるということが議論の前提になっている。人間行動生態学や進化心理学が実践してきたように、適応主義的アプローチはヒトに対しても適用しうが、恐らく自然科学と人文科学をわかつ諸学の歴史的背景も影響して、文化・社会人類学からの反発はいまだに根強い。本研究会においても、この分野間の溝が「人類学と霊長類学の協働」を阻みうるひとつの障壁として位置づけられてきたが、今後さらに建設的に議論を交わしていく必要があるように思える。この溝をいかにクリアするかという点は—それは溝を解消するというよりかは、アプローチの違いやそれによって捉えうる社会性のアスペクトの違いを整合的に位置づける作業になるだろう—とくに適応主義的アプローチを採用するサル屋とヒト屋に課せられた課題のひとつといえよう。

一方、後者の方法論は、私自身の不勉強と、関連分野内でも大きく異なる方法論が複数あるため、適応主義的アプローチほど一般化して位置づけることはできないが、ここで想定しているのは私がこれまで参考にしてきた相互行為研究やエスノメソドロジーの方法論である。これらの方法論は、主としてヒトを対象に理論構築されてきたものであり、文化・社会人類学との相性は悪くないかもしれないが、「進化」と結びつけて語られることはほとんどない。そのため、この結びつきがいかに可能であるかを考えることが、私自身の課題となっている。私はこれまで霊長類を対象に、後者の方法論でその社会性を記述することを目指してきたため、本研究会におけるサル屋／ヒト屋、霊長類学／文化・社会人類学という区別に居心地の悪さを感じてきたが、むしろ中途半端な位置に置かれていることを活かして「社会性の進化」を語る方途を探ってみたい、ということである。この研究会の前身である『人類社会の進化史的基盤 (1) ~ (5)』やその複数の成果論集において、「社会性の進化」をめぐるさまざまな議論が交わされてきたが、少なくとも私は、自身が記述してきたチンパンジーの社会性にヒトとの比較において見出された共通点を両種の社会性に共通する進化史的な基盤として、相違点を共通祖先から分岐したあとそれぞれが独自に進化させてきた社会性として位置づけるのみで、「進化」という現象それ自体を考えることを避けてきたという反省もある。

## 2-2. 相互行為と社会の循環

本発表の副題にも挙げた「相互行為と社会の循環」とは、これまで私が霊長類の社会性を記述しようとする際に、毎回のようにたどりつくことになったシステム論的な考え方を表現したものである。つまり、そのつどおこなわれる相互行為のやり方、その際の



他個体との付き合い方としての「社会性」を生ぜしめる原動力は、それら個々の相互行為において参与者どうしが構成しました制約もされるような、当該相互行為を超え出た「社会なるもの」に由来する、というものである(花村 2019)。

たとえば、ニホンザルは血縁のあるメスたちが継承性のある群れを形成するが、そうした複数の群れを出入りするオスを、群れとの社会空間的な位置関係から「中心オス」と「周辺オス」(「追随型群れ外オス」[伊沢 2018]もその延長線上に位置づけると私は考えている)に区別することができる。この社会空間的位置の差異を俯瞰的にみることで、一般に「二重同心円構造」と呼ばれるニホンザルの群れの社会構造が抽出される。この二重同心円構造が安定的に再生産される機序として私が見出したのが、その社会構造と、それを生成したそれに規定もされるような相互行為との循環的な過程であった。すなわち、周辺部におり群れメスの多くと親和関係を形成していないオスがメスと遭遇した際にメスの悲鳴をきっかけに群れの複数個体に追われて逃避し、その結果群れメスから離れて周辺部で観察されることになり、そうして離れているがゆえに多くのメスとの親和関係が形成されず、遭遇時に再び逃避することになるという、相互行為(逃避に至る相互行為)と社会(二重同心円構造)の循環である(花村 2005, 2015)。

また、『人類社会の進化史的基盤(2)～(4)』研究会の成果論集では、同じ集団を構成するチンパンジーどうしが互いに相手の出方次第という態度で「長距離音声パントフートを介して非対面下でおこなう相互行為のやり方」や「挨拶せずに別れ、再会する限りにおいて関係を維持・更新するという他個体との付き合い方」に着目した。そしてそうした社会性(相互行為)が、「互いに離れていることの可能な個体たちが離合集散しながら集団を形成する」という彼らの共存の様態(社会)と、相互に規定し合うように形づくられているということを描き出そうと試みた(花村 2013, 2016, 2020; 花村 2021も参照)。

さらに、「ホミニゼーション」に力点が置かれることになった『人類社会の進化史的基盤(5)』研究会の発表(花村 2019)では、ホミニゼーションの道程で人類の相互行為と社会の循環のあり方に以下のような大きな変化が生じたと想定した。すなわち、相互行為と社会の循環のあり方が「言語を扱う能力/言語システム」の獲得・発達と連動してそれ以前とは様相を変え、当該相互行為を超え出た「社会なるもの」それ自体を自己言及的に参照する相互行為が可能になったことで、それまでも連綿と続いてきた相互行為との循環において産み出されてきた社会とは位相の異なる抽象化された《社会》が析出され、人類はその抽象化された《社会》こそをリアルに生きるようになった、というものである。この想定のもと、チンパンジーが当該相互行為を超え出た「社会なるもの」に直接アクセスしてふるまっているように思えた事例、言い換えると、抽象化された《社会》がそこに立ち上がっているように感じた事例を、F・ドゥバールの記述やそれに類した私自身の観察例から紹介した。具体的には、ドゥバール(1998)が「集団生活するうえでの特質作り」に関わる「コミュニティへの関心 Community Concern」に裏打ちさ

れたふるまいとして位置づけてきた「敵対的交渉の仲裁」や「縁者最良では説明のつかないルーザーサポート」、「集団全体に影響を及ぼすような高順位オスどうしの激しい争いに対する集合的な非難、そうした争いが収束したあとの集合的な親和交渉」などである。

しかしこうした相互行為は稀にしか観察できず、とくに野生化では観察内容も断片的であることが多いため、一般化すべく分析するには少なくとも私の手持ちのデータでは質・量ともに不十分である。そこで次に、抽象化された《社会》を幾分ゆるく捉え、《集団のみんな》《その日遊動をともにしてきた／してゆくみんな》といったイメージが立ち上がる契機となりえそうな「集合的なイベント・同調行動」に着目するという方向性を考えた。そこではとくに、日々繰り返され、質・量ともにデータが豊富なトピックとして、チンパンジーの「朝夕のパントフートの盛り上がり」や「ベッド作りのタイミングの同調」の2場面を紹介した。概要は以前の報告(花村 2019)に記したので省くが、これらもまた「集団生活するうえでの特質作り」として位置づけうるし、その積み重ねのなかで彼らが自己言及的に参照するような《社会》(《集団》《みんな》といったイメージ)が析出しているもおかしくない。

本発表の準備段階では、この「集合的なイベント・同調行動」の話をもとに展開するつもりであった。実際にはまったく踏み込めなかったが、そこでは、上記の2場面だけでなく、普段の別れや再会の場面、複数個体がしばらく遊動をともにする場面にも共通してみられるチンパンジーの社会性を、「待つ・合わせる・(移動したりパントフートを発したりベッドを作るべく木に登ったりして)見せる」という観点から改めて整理し、そうした相互行為のやり方・他個体との付き合い方が彼らの離合集散社会と互いに他を規定しつつ形づくられている様子を再確認しつつ、その循環の過程で自己言及的に参照しうる《社会》が析出している可能性を探ろうと考えていた。この方向で分析を進めてうまくいくかどうかはいまだまったく未知数であるが、このような形でチンパンジー(そのなかでもとくにマハレM集団)の「共存の様態を実現する社会性」を、彼ら特有の「相互行為と社会の循環」のあり方という水準でより一般化することができたら、そのあり方の違いとして、他集団のチンパンジー、ニホンザルやヒトの社会性との比較も可能になるだろうし、ひいては「相互行為と社会の循環」のあり方それ自体の進化を考えることも可能かもしれない。

ただし、抽象化された《社会》の析出という論点については、そもそものきっかけが「ホミニゼーション」である以上、ヒトに特徴的な社会性が進化する道程に現生の霊長類の社会性を位置づけるという形にならざるを得ないだろう。そのため、チンパンジーやニホンザルがヒトとは別様な社会性をそれぞれ独自に進化させてきたという側面をこの話にどのように組み込むかという点も考えていく必要がある。また、ここでいう「進化」が具体的にどのようなしくみで生じるのか、前節で触れた適応主義的アプローチが想定する「進化」だけでなく、さまざまな「進化」のしくみを検討していかなければならないだろう。

あるいは、「同調」や「集合的なイベント」という現象それ自体を掘り下げ、そのやり方のヒトとの共通点や相違点を探るという方向もよいかもしれない。これらの現象を可能にしているさまざまなふるまいを「待つ・合わせる・見せる」という表現に集約することの妥当性や有効性を検討することがまずは求められるが、そうした能力こそが、生き物たちが互いの行為を調整しながらともに生きていく際の根底にある社会性ではないかという直感もある。この直感が外れていなければ、この方向で分析を進めることで社会性の「進化」だけでなく「起原」も勘考の対象に入ってくるだろう。

### 3. 猿曳きにおける異種間の相互行為

2つめトピックは、長年にわたって猿曳き（猿回し・猿飼い・猿舞ともいう）を実践してきた村崎修二氏を中心とするグループとの交流が生じたことをきっかけに考え始めたものである。まだその調査の実現可能性も定かではないが、「ヒトに特徴的な社会性とチンパンジーやニホンザルのそれぞれに特徴的な社会性」や「種を超えた社会性の共通の基盤」を探るうえで、これらの「種内」ではなく「種間」の相互行為に着目するのも有効であると考え、本発表でそのアイデアを紹介した次第である。

発表ではまず、室町時代から江戸時代にかけての猿曳き芸の興りと明治以降の商業的・文化的な発展や衰退の歴史を簡単に振り返ったあと、主として村崎修二氏の足取りに沿って、戦後改めて復興した猿曳き芸の実態を紹介した。詳細については、彼の自伝的な著作である『花猿誕生』（村崎 1986）、元大阪人権博物館学芸員の太田恭治氏を聞き手としておこなわれた研究者・演出家・音楽家・俳優などとの対談や浅草雑芸団代表の上島敏昭氏による同行記をまとめた『愛猿奇猿』（村崎 2015）、彼の旅と芸の内容やその背景にある思想についての語りを克明に記録した『猿曳き参上』（香月・佐藤 1991）にあたってほしい。

ここでとくに強調しておきたいのは、村崎修二氏が筑豊大介氏らとともに興した猿舞座のメンバーは、現在の日本でみられる猿曳き芸の大半がそうであるような、猿とのあいだに徹底的な優劣関係を築き、懲罰刺激による条件付けで猿に芸を覚えさせる「叩き仕込み」ではなく、戦前まではおこなわれてきた、綱をつけずに芸をする「花猿」を育てるための伝統的な「本仕込み」の継承とその現代における展開を試みてきたという点である。そこでは、できる限り生活をともにすることで猿との信頼関係を築くことが最優先され、芸そのものもそれぞれの猿とともに作りだしてゆくような側面が強い。こうした猿曳き芸において、ヒトとニホンザルは互いのふるまいを繊細に調整しながら働きかけ合っている（待つ・合わせる・何かをして見せる）ことが予想される。多分にズレを孕みつつも継続されているであろう、そうした相互行為を支える猿曳き師と芸猿のペアごとの慣習や両種に共通の社会性、あるいはそれぞれの種に特徴的な社会性を探ることができるのではないだろうか。

さらに言えば、猿舞座のメンバーは、商業的にも、戦前までおこなわれていた「じょう

げゆき」を実践しており、そのつど寄ってくる人間相互の親和感を強めるような「輪の芸能」として路上や広場で芸を演じ、「投げ銭」によって稼ぎを得るといった営みを継続してきた。そのため、こうした猿曳き芸は、それを鑑賞して談笑したり、そこに直接的に参加したりする客のふるまいも交えた相互行為として成立していると考えられ、異種間の相互行為としてだけでなく、見せる側と見る側に非対称性のある芸・見せ物の相互行為としても、非常に興味深い実例となろう。

#### 4. 霊長類を対象としたフォト・エスノグラフィーの可能性

3つめのトピックは、本研究会とは別の研究会である「フォト・エスノグラフィーのモデル化に関する基礎研究」において「写真」と「霊長類」の関係を考える過程で思いついた副産物である。第1節で触れた「サル屋が霊長類の観察場面や行動記述をヒト屋に伝える」「サル屋とヒト屋が分野を超えて分析の枠組みとして共有しうる行動類型を探る」といった本研究会の課題に対して、「写真」を用いた行動記述のもつ可能性を探ってみたいという目論見があった。

そもそも「フォト・エスノグラフィー」はヒトの営みを撮影・記述する方法論として想定されてきた。そこで発表ではまず、その方法論を整理するとともに誌上で実践もしている田原・岩谷(2015)とConord(2002)に依拠してその概要を簡単に紹介した。また、とくに「撮影者と被撮影者との関係」という観点から、私が撮影したタンザニアやキューバのヒトの写真とタンザニアのチンパンジーの写真を、被撮影者との関係や撮影現場で生じた被撮影者との相互行為に触れつつ比較し、フォト・エスノグラフィーの対象をヒト以外の霊長類に広げるにあたって生じうる倫理的な課題について検討した。そのうえで、これは「フォト・エスノグラフィー」というより「フォト・エソグラム」の実践というべきかもしれないが、写真による霊長類の行動記述の可能性と限界を探るべく、調査中に撮影したチンパンジーのさまざまな写真を、それらの写真によって表現したい内容についての言語記述と合わせて例示した。そこで確認できたことを以下にまとめる。

まず、フレーミングによって(これは事後的なトリミングによってもある程度は可能だがここでは撮影時のそれ)、彼らが生活している自然環境を強調したり個性を強調したり、周囲の他の調査者や観光客を写し込んで「ヒトもいる調査現場」であることを強調したり逆にそれらを写し外して「ヒトのいない野生下」であることを強調したりしており、使用する際の文脈に応じてそれらを使い分けている。また、フレームがある・視覚のみ・静止画であるという点で撮影しうる内容に限界はあるものの、上述の通りフレームがあるからこそ表現したい主題を明確にすることが可能であり、チンパンジーのふるまいや視線・姿勢などから、しばしばフレーム外にある何らかの対象(たとえば食べ物である樹上の果実や藪の奥にいる何者かの気配、遠くから聴こえてきた他個体の声)への彼らの注意・関心を写し込み、それによって写真には写らない音や匂いを想像させたことも可能である。さらに、動きも瞬間的なものであればブレによって、経時的な変化も連続写真に

よって表現することが可能であり、組写真によってある程度の期間にわたって生じたできごとやストーリーを集約して示したりすることも可能である。そして、写真によって、さまざまな行動や相互行為、(被撮影個体の)注意・関心、活動状態や社会的状況が記述できることが確認されたが、それらの内容は、言語で記述する際に過剰な解釈・擬人的な解釈とはみなされずに許容される範囲とおおむね一致する。この点は、サル屋が主として目で見えて観察しえたものを言語で記録し公表していることを踏まえると当然ではあるが、逆に言えば、霊長類を観察した経験のないヒト屋に対して、霊長類の任意の行動についての言語記述の妥当性を写真によって示すことが可能であるということの意味するだろう。発表ではここからさらに、本研究会で何度か見込みのありそうな「サル屋とヒト屋が分析の枠組みとして共有しうる行動類型」として議論されてきた伊谷(1987)の行動類型を用いて整理を試みたが、これについては発表後の現時点でもうまく整理しきれていないためこの報告では省略する。

本発表で例示したような写真による霊長類の行動記述は、サル屋が古くからその著作や学術雑誌において、分析の対象とする行動についての言語記述を補足する手段として利用してきた方法である。ヒト屋の方が、その対象である人びとの行動や営みを記述するうえでこの方法をより自覚的に用い、またその方法論それ自体を研究の対象としてきたように思えるが、サル屋の方でもそうした作業を進め、写真による記述の可能性や限界を議論することも「人類学と霊長類学の協働」に与するところはあるだろう。

発表時にいただいたコメントの一部をつけくわえると、調査中に撮影した写真は、「確かにそこに私はいた」「確かに私は見た」という観察者の特権性やそれゆえ記述する権利があるという著者としての権威を表す手段としても機能している。また、近年のサル屋を含めた動物研究者は、本発表で例示したような調査者=撮影者の著者性や表現としての側面が強い写真ではなく、自動撮影カメラやドローンカメラで記録した写真それ自体を「データ」として、個体識別や動物相調査、さらには個体数推定や群れ内の個体間距離などの数量評価に用いているという点も考慮する必要がある。とくに自動撮影カメラについては、この発表のあと開始した、山口県周防大島の瀬戸内海沖にある大水無瀬島に生息するニホンザルの予備調査において奇しくも私も使用することになったため、この方法で記述しうる内容と非自動カメラで記述しうる内容や、両者の著者性の差異を比較考察していく予定である。こうした論点も含めて、このトピックの着地点について今後も検討していきたい。

ところで、野外調査中に霊長類の行動を撮影するのはなかなか困難な作業である。観察内容をフィールドノートに記録するという形で調査していた私の場合、観察すること、そしてその内容を言語で筆記する作業が最優先であり、観察内容を撮影する暇はほとんどないし、大抵の場合、小型のものであっても壊れやすいカメラは気を使わねばならない邪魔な荷物である。また、私が観察方法として主に採用していた「個体追跡」という方法は、観察対象個体がこちらを気にしない程度に距離を保ちつつ追跡するという繊細な相互行

為の連続であり、そもそもその生息環境に馴染んでいないと追跡することすら困難なものである (花村 2015)。そうしたなかシャッターチャンス「待ち」、観察対象個体の動きに「合わせて」記述したい (「見せたい」) 内容を撮るという作業を実現するには、むろん運も必要だが、「この個体はこの時間帯にこの状況なら次にこうするだろう」「このまま進むとあの辺りに先回りすることで開けた場所で撮れるだろう」といった予測を立てるための経験も要求される。そのため発表中に例示した写真には、ノートに記録を取らない撮影日を設定して撮った写真が多く含まれていたりする。

このような調査現場での撮影の難しさは、サル屋に限らずヒト屋にも共通するものがあるだろう。撮影対象がヒトであるからこそ撮影が憚られる場面もしばしばあるだろうし、被撮影者の撮影行為に対する応答も、激しい拒絶から協調的なものまでさまざまであるだろう。互いのフィールドに実際に行ってみることができたら一番よいが、写真を見せるだけでなくその撮影の背景も紹介し合い、互いの調査現場の様子を共有する作業も、「人類学と霊長類学の協働」を促すひとつ足がかりになるのではないだろうか。

#### 謝辞

本報告第4節の調査と分析は、科学研究費補助金基盤研究 (C) 「フォト・エスノグラフィーのモデル化に関する基礎研究」 (#21K01070、代表者：岩谷洋史) の資金援助を受けておこなわれた。また、第3節の調査アイデアは、太田恭治氏のご支援および筑豊大介氏と村崎修二氏が提供してくださった資料や情報によって考案することが可能になった。感謝申し上げます。

#### 参考文献

- Conord S 2002 Le choix de l'image en anthropologie: qu'est-ce qu'une "bonne" photographie?  
*Ethnographiques* 2 (<https://www.ethnographiques.org/2002/Conord>)
- 花村俊吉 2005 「ニホンザル餌づけ群におけるオスの空間的位置とメスとの社会関係：空間的位置の分化機構と差異の観察」 京都大学理学研究科修士論文。
- 花村俊吉 2013 「見えない他者の声に耳を澄ませるとき：チンパンジーのプロセス志向的な慣習と制度の可能態」 河合香史編『制度：人類社会の進化』京都大学学術出版会。pp. 167-194.
- 花村俊吉 2015 「フィールドでサルと出遇い、その社会に巻き込まれる：観察という営みについての一考察」 木村大治編『動物と出会うI：出会いの相互行為』ナカニシヤ出版。pp. 87-104.
- 花村俊吉 2016 「見えないよそ者の声に耳を敬てるとき：チンパンジー社会における他者」 河合香史編『他者：人類社会の進化』京都大学学術出版会。pp. 177-205.
- 花村俊吉 2019 「『社会なるもの』が垣間見えるとき：チンパンジーの『コミュニティへの関心』と同調による『集合的なイベント』」 『社会性の起原：ホミニゼーションをめぐる』 2018年度第2回研究会 報告書 ([http://www.aa.tufs.ac.jp/documents/jrp/jrp242\\_02ja.pdf](http://www.aa.tufs.ac.jp/documents/jrp/jrp242_02ja.pdf))
- 花村俊吉 2020 「新入りメスがはぐれるとき：別れと再会からみたチンパンジーおよびヒトの共存の様態とその極」 河合香史編『極限：人類社会の進化』京都大学学術出版会。

- pp. 175–210.
- 花村俊吉 2021「動物社会の共存の様態とあいさつ：挨拶せず別れるチンパンジー、挨拶せずには別れにくいヒト」木村大治・花村俊吉編『出会いと別れ：「あいさつ」をめぐる相互行為論』ナカニシヤ出版. pp. 235–257.
- 伊谷純一郎 1987『霊長類社会の進化』平凡社. (第5章「社会構造をつくる行動」〔原著1981年〕)
- 伊沢紘生 2008『野生ニホンザルの研究』どうぶつ社.
- 香月洋一郎・佐藤桂子 (編) 1991『猿曳き参上：村崎修二と垂登夢の旅』平凡社.
- 河合香吏 2016「進化から「他者」を問う」河合香吏編『他者：人類社会の進化』京都大学学術出版会. pp. 1–18.
- 村崎修二 (編) 1986『花猿誕生：道ゆく芸能をもとめて』清風堂書店.
- 村崎修二 (編) 2015『愛猿奇縁：猿まわし復活の旅』解放出版社.
- 田原範子・岩谷洋史 2015「フォト・エスノグラフィーの理論と実践」『四天王寺大学紀要』60: 65–86.
- ドゥバル F 1998『利己的なサル、他人を思いやるサル：モラルはなぜ生まれたのか』(西田利貞・藤井留美訳) 草思社.

#### 質疑応答と主な議論：

##### <社会構造や「社会なるもの」の捉え方>

- シャーリー・C. ストラム (Shirley C. Strum) の記述にもあるように、客観的だと思われているものも、実は社会的に構築されたものであるという話がある。ニホンザルの同心円構造やチンパンジーの社会構造も、研究者と研究対象の相互作用の中で成立させてきたものであるという見方もできるのではないか。
- 写真やデータを提示して議論していくことも、それを提示することが社会構造を実在するものとして作り上げていく過程であると捉えられる。
  - 社会構造を考える時に、分析の中で確からしいものとして示されるレベルと、私たちが今いる社会の中で現実のものとして定着する過程、という別次元のものがあるのだと思う。
  - この研究会で社会性の起原や進化を考える時に、その過程を分析して議論するという方向もあるかもしれない。
- フィールド研究をやっていると誰でも社会が垣間見える場面に出会うが、お互いに観察を信用できなかったり、自分でも自分が見たものが何なのか分からなかったりすることがある。それを解消するために量的にデータを取ろうと、見たものを細かく分割してサンプリングし、データ解析を通して再構築したときにその場面がまた見えてくるように書くわけである。分割したものからまた積み上げることができない場面に注目しようとしているのは、観察者のセンスが問われている部分であるし、どう記述して自他ともに説得力を持たせるのを考える部分でもあり、とても重要だと思う。社会が垣間見える場面を集め

て詳細に記述していくことで人を説得していくという文化人類学の手順とも重なる部分にもなり得るかもしれない。

→ 同心円構造やパントフートの話は日常的に起きている相互行為を素材にして、社会の循環的な過程を考察するという方法をとってきた。今後は、日常的な同調とか朝晩のパントフートの盛り上がりとかベッドを作って一緒に寝るといった、観察回数が比較的多い事例ともあわせて、両側面から考えていきたい。

### <写真・フォト・エスノグラフィー：データとしての写真>

- 国際自然保護連合(IUCN)が、霊長類の写真の公開の仕方に関するガイドラインを公表している(<https://human-primate-interactions.org/wp-content/uploads/2021/01/HPI-Imagery-Guidelines.pdf>)。人と関わり合いを持っているとか、野生霊長類がコンパニオンアニマルであるかのような印象を与える写真は、公開すべきではないという内容である。
- 行動を記載する補助として写真を使うのは意義があると思う。一方で、たまたま映り込んでいた事柄にはフレーミングの問題があり、そこから得られる情報は限られているので、その写真そのものから直接的に何かを積極的に言うのは危険ではないかという印象を持つ。フォト・エスノグラフィーでは、その点についてどう考えているのか。
  - 十分に議論されているわけではないが、写真そのもので研究をするのではなく、写真がどう使われているかということや、どのように加工されているかという過程を分析対象とする必要があると思う。
  - 写真を提示することでできる記述というのは、この研究会の方法論の議論にも有効なのではないかと思う。
- フォト・エスノグラフィーでは研究者が目的意識をもって意図的に撮った写真を提示するというように聞こえた。少なくとも霊長類研究では撮影のあり方は多様で、カメラトラップでの撮影は記述ではなくて記録データである。その違いについての概念整理ができていないと議論がかみ合わなくなってしまうが、フォト・エスノグラフィーのなかではどう位置づけられているのか。
  - そういう観点の議論は今後必要になってくる。現状では、作家性とかアート性みたいな視点で写真を使っている人が多いのではないかと思う。
- 写真がデジタルになって以降、ピンボケの写真も捨てられず同じような写真がある中で、何を基準に選んでいるんだろうというところに興味があるので今日の話は面白かった。
  - フィルムカメラとデジタルカメラの違いは大きいと思うので、今後そのような点も含めて検討したい。

### <写真・フォト・エスノグラフィー：写真を示すことの効果>

- 写真を提示することは、ある話題について語ることの権威付けにもなる。写真を使うとい



- うことを通して構造を作り上げるという視点から考えるのも面白いのではないかと思う。
- 写真には、写真を撮る人と撮られる人の相互作用と、撮られる人たちの間の相互作用という二つの側面がある。この二つの相互作用の違いはとても大きく、IMRAD形式を志向しできるだけ透明人間になって観察するのが理想とするタイプと、自己の存在を提示して相手とのインタラクションを通して新しいことを引き出そうとするタイプの違いと考えてもいいだろう。
  - 写真を提示することによる権威付けという面でも、誰に対する権威なのかという点で二つの見方ができる。一つは写真に写っていることについて語ることで周囲の人に示す権威で、もう一つは、撮影者の存在が希薄な写真を提示することで、被写体の知らないところで写真を撮っているという被写体に対する権威だと思う。そういうのが全部重なっているような気がする。
    - 写真を提示することが自分の特権性みたいなものを示すことになるというのは全く考えていなかったが、そういう場面もあると思うので、考えていきたい。
  - 「説得の技法」として、なぜ図でも文章でもなく写真が使われるのか、どのような場合に使われるのか、どういう効果を生んでいるのかという問いは面白そうだと思う。
    - 個人的には、説得技法として写真を使うということはあまりしておらず、パントフートやチンパンジーの生活環境を例示するというくらいのニュアンスでしか使っていない。しかし、写真に積極性を持たせたり、データとして提示したりすることもあり、様々な使い方があると思う。
  - フィールドで、撮られる人と撮影者だけでなく、撮影される人同士とか、撮影される人と撮影されるモノとの関係が表出したことがある。村人が獲ってきた鳥や動物を生きているうちに撮ろうとすると、真意は分からないが、「これから食べるから」と言って殺してしまう。一例だけ、親ザルを殺したら出てきた子ザルをペットにすると聞いたことがあり、その時は生きている子ザルの写真を撮らせてくれた。ゾウの写真を見せると、「こんなに近くでゾウを見るのはとても危険で、撮った人は殺されているに違いない」と言う。そこには彼らのリアルな生活感が表われている。写真をめぐってそのような視点が見えてくると面白いのではないか。
    - 写真のリアリティについては考えていなかった。ゾウの話はまさにそうで、見る人のリアリティは人により違うため、その辺を考えないといけないと思う。

(以上)